

4 . やさしい育成技術

子馬の管理方法 ~ 初期育成調教の方法 その2

日本中央競馬会 日高育成牧場 専門役 頃末 憲治

今号では、JRA 日高育成牧場で実施している騎乗馴致に対する考え方について解説していますので、ご一読いただければ幸いです。

騎乗馴致について

競走馬の世界で一般的に用いられている馴致という言葉は、「馬の背に鞍を置いて人が騎乗できるように馬を馴らすこと」の意味で多く使われています。しかし、広義では、「競走馬としてデビューするために必要となる数多くの物事に対する教育」ととらえることができます。例えば、人を乗せて走ることは、競走馬として必須ですが、それのみでは十分とは言えません。手入れ、トレーニング、輸送、装蹄、ゲートなどの数多くの物事を、人とともに落ち着いて実施できるようになって、初めて競走馬としてのデビューが可能になります。また、馬がもつ能力を競馬で100%発揮するためには、人の指示に従うことが必要不可欠です。このように捉えた場合、競走馬の馴致は生まれ落ちたときから、出走という目標に向けて始まっているといえます。つまり、日々の馬への接し方が馴致であるともいえます。このため、馬を取り扱う者は、馬に求める目標を明確に見据え、それぞれの時期に済ましていなければならない躰（しつけ）や作法を、確実に積み重ねていくことが重要です。

騎乗馴致のことをブレーキング (breaking) とよびますが、これは騎乗時に手綱を引いて馬が止まるブレーキ (brake) を馬に装着するのではなく、馬同士の約束事を壊し (break)、新たに人と馬との約束を構築することを意味します。通常、サラブレッドの騎乗馴致は1歳秋 (9~11月) に行われることが多く、パッティング、引き馬、腹帯馴致、ランジングおよびドライビングなどの過程を段階的に実施していきます (表1)。これらの過程を確実に実施した後に、馬房内での横乗り、馬房内騎乗、ペンでの騎乗を段階的に進めて、走路で落ち着いた騎乗ができるようになるまでさまざまな環境に慣らしていきます。

表1 騎乗馴致までの流れの概略

ステップ	目的	前準備	第1週	第2週	第3週	第4週
ハミ受け	馬を御す	引き運動 口腔チェック	ペン内 ランジング	ペン内 屋外 ドライビング	ペン内 騎乗 (速歩・駈歩)	パドック 走路
鞍付け、騎乗	馬に騎乗する	パッティング ストラップ	腹帯馴致	装鞍・横乗り		集団で騎乗

騎乗馴致に対する考え方

馴致とは「馴らして目標とする状態に至らしめること」であり、その際、馬にそうさせるのではなく、馬がそうするように仕向ける姿勢が重要です。その原理は、人が馬に対して何かを要求する指示（プレッシャー）を与え、そのプレッシャーから馬が逃げる方向が、人が要求するものと一致するように馬を導きます。達成したときには、持続して与えていたプレッシャーをオフにしてあげることによって、馬は楽になれることを理解します。言いかえると、「プレッシャーオフ」とは馬が要求に答えた際、即座に、声をかけたり愛撫をしたりして褒めることともいえます。馬は草食動物であるので、危険なもの（プレッシャー）からは回避すると同時に、同じ場所にとどまって草を食べる安住の場所（プレッシャーオフ）を求めています。馴致では、その馬の習性を上手に利用することが重要です。したがって、馬が疲労困憊するまで反復練習を行うよりも、人の要求を理解したときに即座にプレッシャーを解除してあげるのほうが効果的に馬を教育することができます。以下に JRA 日高育成牧場で取り組んでいる馴致を進める際の留意点を述べます。

1．人馬の信頼関係を築くこと

信頼関係の第一歩は、人と一緒にいることで安心できる関係、雰囲気作りであり、この取り組みは生まれて間もない時期から開始します。

2．人が馬のリーダーになること

馬取扱者や騎乗者は、馬に接する際、常にリーダーであるように心がけなければなりません。これは馬に恐れられる存在になることではなく、何かが起こった際に、人の指示が尊重されることを意味します。特に、牡馬は自分がボスと勘違いする傾向を持っていることから、そのような場合には、馬に対して毅然とした態度で接し、人への尊敬を教えることが重要となります。一方、牝馬の場合には、馬が怖がっているのか、反抗しているのかの判断が大切であり、基本的には穏やかに接します。

3．馬に経験を積みさせること

馬は新しい物事に対して臆病であり、驚きやすい動物です。反面、自分に危害が及ばないことを理解すれば、かなりの物事に慣れる習性を持ちます。したがって、競走馬になるために必要なことは、怖がるから避けて通るのではなく、積極的に馬に体験させて慣れさせることです。

4．段階的に進めること

人の都合で馬が理解していないのに馴致におけるステップのいくつかを省略した場合には、トラブルがおり、馴致の失敗として馬の心に大きな傷が残ることがあります。この失敗は、人間不信や落ち着きの欠如などとして後々まで悪影響を及ぼしますので、先々を見据え段階的に馴致を進めることが重要です。

5．明確な指示を発すること

馬に対する指示は、態度や言葉を正しく理解してもらわなければ意味がありません。馬は、常にリーダーである人の感情を気にしています。したがって、明快に人の指示を馬に与え、それに対して馬が正しく反応したのかしなかったのか示してあげる必要があります。例えば、馬が正しく指示に従った場合には、「～をやりなさい」というプレッシャーを即座に解除し、優しく声をかけてあげます。一方、正しく反応しない場合には、指示を継続するとともに「アッ!アッ!」というよう

な注意を喚起する声を発し、正しくない行動を取ったことを馬に理解させます。馬は「懲戒」よりも「プレッシャーオフ」に対してモチベーションをもつ動物であることを理解する必要があります。

騎乗馴致を始めるための事前準備

騎乗馴致を始めるに当たり、事前実施しておく必要のあることについて説明します。

1．安全確保のための人馬の装備

騎乗馴致に当たっては、人馬の安全確保を行いながら進めることが最も大切です。そのためにも、ヘルメット、ボディープロテクターおよび滑らない手袋を装着します。また、ヘルメットのご止めは確実に止めなければなりません。一方、馬には前肢にプロテクターを取り付け、必要に応じてオーバーリーチブーツ（いわゆるワンコ）を装着します。

2．ハミ受けのための口腔内のチェック

最初に馬の口を開けて歯や口腔内に異常の無いことを確認します。狼歯（いわゆる痩せ歯と呼ばれるもので、第1前臼歯の痕跡であり、萌芽しない馬もいます）が伸びていれば抜歯します。これは調教が進むとハミ受けのトラブルの原因になるためです。臼歯の辺縁が峻立していると口腔粘膜に傷害を与え、咀嚼やハミ受けに悪影響を与えるため、歯鑿（しろ：歯を削るためのヤスリ）で削って滑らかにします（図1）。

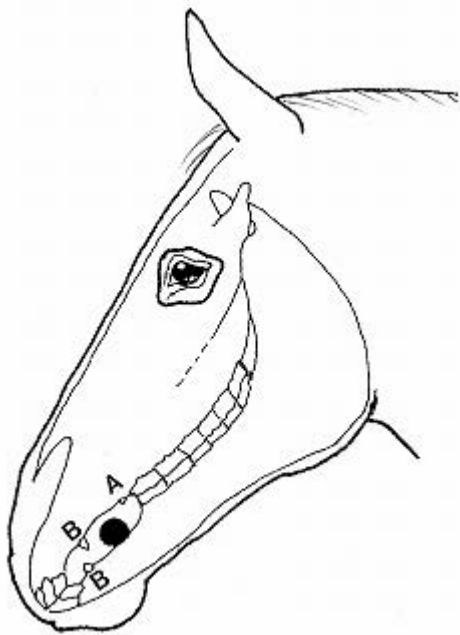


図1 馬の歯並びとハミの位置

：ハミの位置、A：狼歯（やせ歯）、B：犬歯（のみ）

3．タオルパッティング

タオルパッティングは「触られることを嫌う部位の接触に慣らすこと」、「馬の死角部位（頭の後やキ甲付近）まで十分に慣らすこと」を目的として実施します。そのために、触れられるのを嫌う部位（耳の後ろ、尻部、膝、背中、腋下等）を重点的に実施します（図2）。タオルパッティングは手や柔らかいブラシで馬体や四肢が触れられるようになってから開始します。タオルをヒラヒラさせると、最初、馬は怖がりますが、死角部分まで十分に慣らすことによって、この恐怖感は除去できます。最初は静かに行い、慣れてきたら左右同様にパッティングしますが、危険防止のため馬の保定者とパッティングする者は常に同じサイドに位置します。馬に声をかけて、常に落ち着いた態度で接するように心掛けます。これによって、人のアクションに対して、無害であるとの信頼関係が構築され、次の馴致段階（ランジング、調馬索など）への移行がスムーズになります。

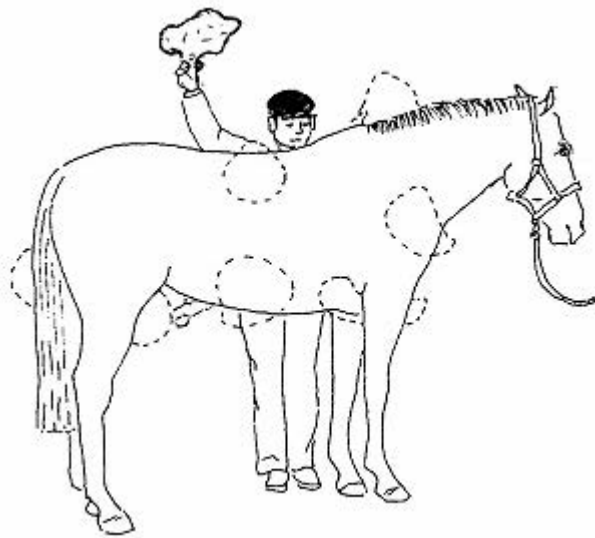


図2 パッティングでは馬を静止させて実施

4．馬房内での回転

馬房内で騎乗する際の事前準備として、馬房内を常歩で回転できるようにしておかなければなりません。最初は二人一組となって、音声とアクションにより、馬が緊張なくスムーズに歩けるようになるまで繰り返します。前進と停止の音声コマンドで馬が動くようにします。停止時は静止させ、人の合図で再び動くように訓練します。最初は左手前で実施し、最終的には両手前で馬が落ち着いて回転できるようにします。

5．ストラップによる圧迫馴致

ストラップによる圧迫馴致は、ペン（丸馬場）内でのローラー（えりあげ）による腹帯馴致を行う前に、馬房内で帯径（おびみち）の圧迫に慣らすことを目的として実施します。最初、馬によくストラップを見せ、匂いを嗅がせて安心させます。初めのうちは静かに装着し、徐々に手早く行うことに慣らします。最終的にはストラップを強めたり弱めたりしながら馬房内を歩かせ、両手前を同様にできるようになるまで行います。この場合、ストラップのリングを背側から回し、ストラップを引き上げることで腹を起点にリングを上げます（図3）。腹帯と同じ方向の圧迫が馬にかかるようにし、緊急時の解除がしやすいように装着します。リングを反対側から回さないように注意しましょう。

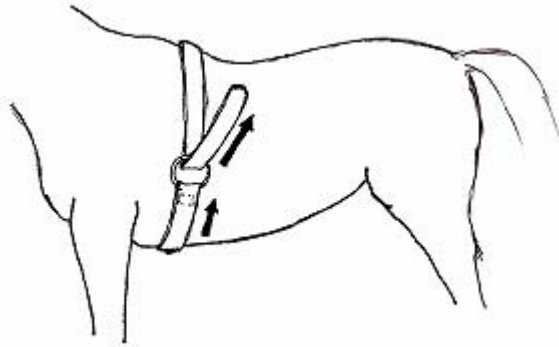


図3 ストラップの装着方法

6．ハミ馴致

騎乗馴致の段階まで無口頭絡を装着している場合には、その2～3日前からハミ芯にキー（舌遊び）が付いた棒バミを馬房内で装着し、ハミに慣れさせます。近年は普段の引き馬でもチフニーを用いることも多く、口腔内の異物としてのハミによる下顎の圧迫に慣れているために、このような場合にはハミ馴致を省略しても問題はありません。

騎乗馴致の流れ

1．ブレーキングビットおよびキャブソンの装着

騎乗馴致においては、まず、ブレーキングビットとよばれるハミとキャブソンを装着します。ブレーキングビットは、初めてハミを装着する馬が口の中の正しい位置（舌の上）で受けることを覚えやすいよう、ハミの中央部にキー（舌遊び）がついています。また、ハミはまっすぐ走ることを教えるため枝のついたものを使用します。キャブソンは鼻革部分にリングがついており、最初是从ここから調馬索（ランジングレーン）をとることで、馬の敏感な口を傷つけずに、ラウンドペン（丸馬場）で周回することを教えるのに役立ちます。

2. ランジング

ランジングとは調馬索を用いて馬を円運動させることです。通常、ランジングは二人一組で実施し、リーダーとアシスタントという役割を分担します。本来、調馬策を持つ者がリーダー、鞭を持つ者がアシスタントという役割分担になります(図4)が、最初は鞭を持つ者がリーダーとして推進役に徹した方が、馬に理解させやすい場合もあります。馴致において最も大切なことは、人と馬の信頼関係に裏打ちされたコミュニケーションであり、二人から相反する指示が出された場合は、馬が混乱するために、二人の連携した指示が重要となります。

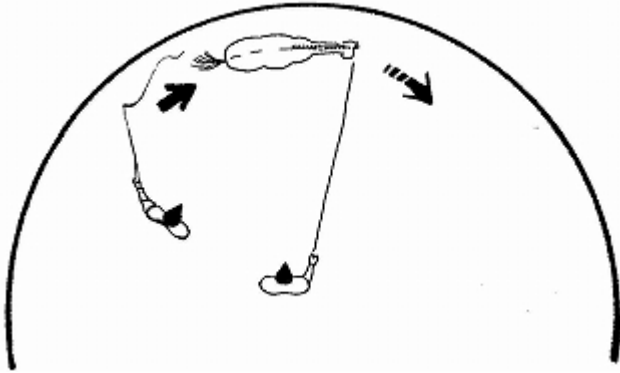


図4 初期段階のランジング(馬の動く方向と人の配置に注意)

1) 最初のランジング(1本調馬索)

最初はラウンドペンで馬を左手前で2~3周引き馬を行い、環境に慣らすとともに壁に沿って運動することを教えます。多くの馬は左手前が得意であり、右手前は苦手です。このため最初は得意な左手前を中心に実施します。時間をかけて苦手な右手前の運動時間を徐々に増加することにより、両手前をスムーズに実施できるようにします。

ランジングは、壁に沿って運動させることが重要です。「人から離れて前に進め」という人のプレッシャー、「これ以上は外にいけない」という壁のプレッシャーのバランスにより、馬は自然に壁に沿って運動します。この最初のステップでは引き馬などで培ってきた進めと止まれの合図をもとに、音声コマンドによって、「常歩」、「速歩」、「停止」を両方の手前でできるよう、馬とのコミュニケーションの確立を行います。最初は同じ蹄跡上で落ち着いた速歩が維持できれば良いといえます。御者が要求している歩法になった時にしっかりと褒める行為は、馬の理解や合図の受け入れを促進します。また、馬に停止を要求する場合には、必ず壁沿いの蹄跡で馬が動かないよう音声コマンドで停止させた後、人が馬に優しい声をかけながら近づき、初めてプレッシャーを解除します。そのようにすることで、馬が人の合図を待たずに内に入って自ら運動を中断することを防止します。

2) ペン(丸馬場)の効用

ランジングは良く訓練された馬であれば、調馬索だけで綺麗な円運動を描かせることが可能です。しかし、ランジング経験のない1歳馬たちは、調馬索で繋がれていても、最初はどのように動いてよいのかわからず、後ろから追われることで直線的に人から逃避したり、外側に大きく膨らんだり、逆に内に入ってくるなど反応は様々です。そこで円運動を馬に効率的に学ばせるためにペンを使用します。

ペンは直径約15mの円形をしています。そのため必然的に中心に位置する御者と壁に沿って運動する馬との距離は常に7m程度に保たれます。この位置関係を保持することで、人は労せずに馬

の運動を継続させ、一定の距離をおいて馬とコミュニケーションを交わすことが可能となります。ペンとその壁を有効に使うことによって、安全でスムーズな騎乗馴致を進めることができます。

3．ローラー装着

馬がラウンドペン内で落ち着いてランジングができるようになったら、ローラー(腹帯)を装着します(図5)。まず、馬を左手前蹄跡上に駐立させた後、胸ガイ(ブレストプレート)を先に装着し、続いてローラーのベルトを締めます。このとき、馬を保持する者、追いムチで推進する者の役割分担を行うことが重要です。馬がローラーの圧迫を嫌って、背を丸めてかぶったり、立ち上がろうとしたりする場合、瞬時に追いムチや声を用いて馬を推進し、前進させます。馬は前方に動くことにより、やがてローラーの圧迫に慣れ、落ち着いたランジングが可能になります。装着したローラーはすぐに外さず、慣らすために30分~1時間程度、装着を継続します。なお、ローラー装着に対する拒否反応が強い馬は半日~1日程度装着を継続することもあります。

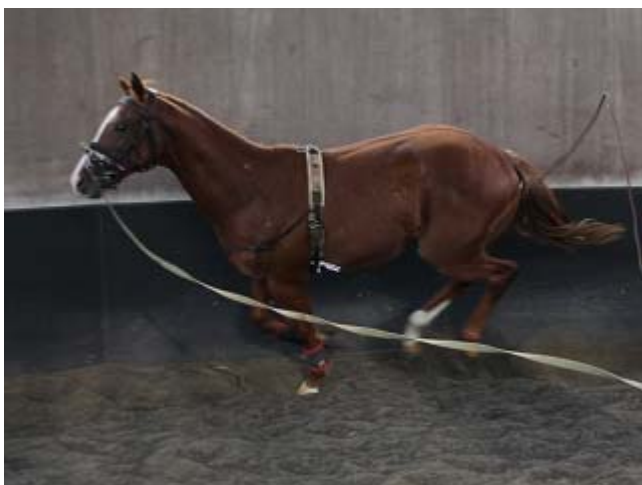


図5 ローラーを装着してのランジング

4．サイドレーンの装着

馬がローラーを受け入れ、1本の調馬索で落ち着いてランジグができるようになったら、サイドレーンを装着します。最初はキャブソンからサイドレーンを取り、馬が慣れたらハミからとります。また、サイドレーンはキ甲部でクロスして使用します(図6)。この方法はアンチグレイジングレーンとも呼ばれており、「グレイジング」は牧草を食べるという意味から、頭を下げて草を食べるのを防止するとともに、必要以上に頭を下垂させず、騎乗時の安定した頭頸を教える上で極めて有用です。

サイドレーンの装着による効果は、馬の口に対してハミの感触を学ばせ、頭頸部の位置を安定させ、ハミ受けをバランスよくさせることにより、頭頸の運動を促すことです(図7)。最初は、ハミでなくキャブソンからサイドレーンを取り、馬が落ち着いていることを確認してからハミを取ります。これは、馬が暴れて口部を損傷しないようにするためです。ローラーに慣れた段階で、ペン内で装着して慣らしておきます。なお、サイドレーンをキ甲部でクロスさせないで直接ハミからとる方法もありますが、この方法は若馬に対しては頭頸部の制御が強いため、頭頸部が下がりすぎた際に前肢に絡まり下顎骨を骨折するなどの危険性があります。

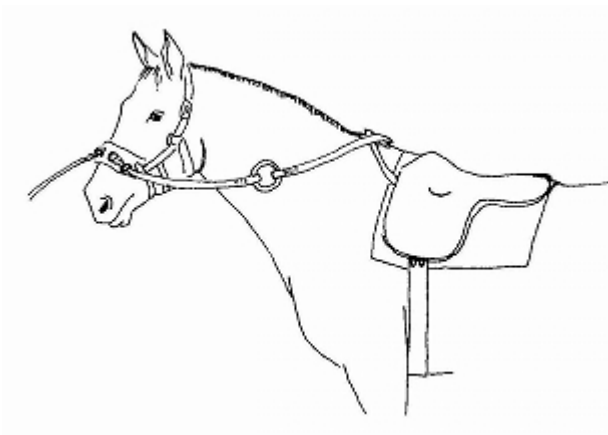


図6 サイドレーンの装着

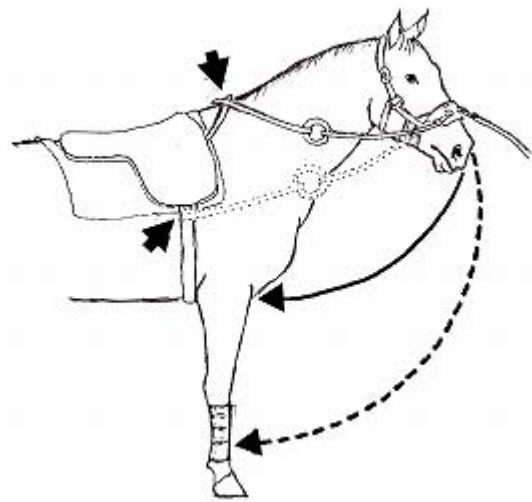


図7 サイドレーンの位置による可動範囲の違い

5．ドライビング

馬がローラーに馴れ、キャブソンからとった1本の調馬索で落ち着いてランジグができるようになったら、ドライビングへの準備として2本の調馬索(ダブルレーン)を用いたランジグに移行します。最初に、補助者が馬をペンの蹄跡で左向きに保持し、2本目の調馬索をキャブソンの外側の環に連結し、御者は馬の左側から調馬索を外側に回します。御者は調馬索を伸展させながら馬の後方に回り、ペンの中央に回り込みます。外側の調馬索は馬の飛節の上に位置させ、強く引かないようにします。この時、飛節に調馬索が触れると馬が驚いて蹴ったり、突進する場合があるので、補助者は確実に馬を保持しなければなりません。

馬がレーンによって飛節に触れられることに慣れ、ランジグがスムーズにできるようになったら、御者が徐々に馬の後方に回り込んでドライビングの体勢を教えます。最初は、ラウンドペンの中で2本の調馬索を保持し、馬の後方から前進気勢を与えることに慣らすとともに、ドライビングによる方向転換を教えます。ドライビングは騎乗する前に基本的なハミ受けを教えることといえ、

バイクに例えるならば、騎乗前にハンドル、ブレーキおよびアクセルなどの制動装置をセットするようなものです。ドライビングでは馬の真後ろから少しずれて実施します（図8）。これは馬の真後ろは死角になるため、馬の見えるところに位置し、声をかけて安心させるためです。

馬が突進した場合には、制御できず、危険であるので、とっさの際に馬を回転させて御すようにします。なお、若馬のドライビングでは、口向きや筋肉の発達が未熟な若馬に対しては制御が強くなりすぎるため、調馬索をアブミに通さないようにします。

ドライビングの実施によって以下の効果が期待できます。①「騎乗することなく馬に基本的なハミ受けを教えられること」、②「脇腹に調馬索が触れることにより、騎乗時の脚の接触に慣れさせること」、③「飛節に調馬索が接触しても、蹴ってはいけないことを学ばせられること」、④「後方からの操作は、騎乗時と同様の位置関係にあり、その関係を理解させること」、⑤「馬が自ら外（未知）の世界に向かう積極的な前進氣勢を養うこと」



図8 御者は馬の真後ろから少しずれた位置でドライビングを実施

5. ドライビング終了の目安

単調なドライビングは馬が退屈するために、場所を色々に変えたり、スラロームを行ったり、ペンや馬房あるいはゲートなどの出入りを行います。そして、常に馬が十分な前進氣勢を保持して調馬索が一定のテンションを保った状態でドライビングできること、後軀を踏み込んで滑らかなスラロームが描けること、新奇環境でも人馬が落ち着いてドライビングできること、および号令に合わせて、常歩からスムーズな速歩への移行、また減速の移行も可能となることが、ドライビング終了の目安と判断されます。

一方、ドライビングでの後退は必要ありません。口向きの不確かな若馬に対して、調馬策を引っ張って後退を教えた場合、ハミから逃げることを覚える危険性が高くなるために、ドライビングでの後退動作は不要かつ危険です。

なお、ドライビングの技術は、騎乗馴致のみならず休養馬や各種疾患の治癒間際に騎乗できない馬に対しても再騎乗に向けた準備あるいは日常の生活リズムの保持などに活用できます。

6. 馬房内での横乗りから騎乗へ

御者の指示によって、自由自在にドライビングが行えるようになれば、騎乗のステージへと進みます。ここでは、馬に人の体重負荷を慣らすとともに、馬にとって死角に当たる真後ろの位置で人が動くことに慣らします。最初の騎乗は馬房の中で実施します。これは、広さの限られた狭い馬房の中であれば、馬が驚いて暴れても、助手が確実に馬の動きを制御することができるからです。最

初は横乗りの状態で助手が馬を保持して馬房の中を大きく回転します（図9）。次に実際にまたがって助手が保持した状態で馬房の中で動かします。馬が落ち着いていればアブミをはいて脚による前進扶助を徐々に教えます。次に、ラウンドペンの中で騎乗することができれば、やがて馬場で騎乗することができます。

このように、ランジグの開始からペン内での騎乗までの騎乗馴致を概ね約3週間かけて実施します。



図9 馬房内での横乗り

最後に

実際の騎乗馴致では、怖がりで逃避反応が速かったり、我が強くなかなか要求したとおりに行動してくれなかったりと、馬によっては非常に難しいこともあります。しかし、どのような馬に対しても人が気長に構え、馬の行動をよく観察することによって難しくしている原因を見出し、求めたい方向へと導いてあげなければなりません。すなわち、①馬に対してその将来を期待すること、②馬に求める目標を明瞭かつ具体的にイメージすること、③その時々馬の状態・能力を確実に把握・理解すること、④段階を踏みながら安全かつ無事に目標へと導くこと、という4つのビジョンをもって馬の馴致を行うことが大切です。

今回記載した騎乗馴致については、2009年12月に発刊した「JRA 育成牧場管理指針」-日常管理と馴致（第3版）-に記載されています。この冊子の必要な方は JRA 馬事部生産育成対策室までお問い合わせください（JRA ホームページの「JRA 育成馬サイト」

<http://homepage.jra.go.jp/training/index.html>）でもご覧になれます。